

いつまでですか

8

(日)

私の魂は震えおののいています。主よ、いつまでなのですか。(4)

2/

長期間の病気に苦しむ詩人が癒しを祈り求めている詩です。詩人は自分の病が罪に対する神の怒りの表れであると受け止めています。病気そのものよりも、神との交わりが断絶していることが大きな苦しみだったのです。そこで彼は、「主よ、いつまでなのですか」と神に問いかけます。終わることのない苦しみに、詩人は神に捨てられたかのような苦しみを覚えていました。そう祈りながらも、「主は私の泣く声をお聞きになった」(9)と告白します。詩人は未だ苦しみの中に置かれていましたが、この祈りは必ず聞かれると信じて、そのように歌いました。彼が契約に基づく神の慈しみを信じていたからです。神を信じるからこそ、私たちは「いつまでですか」と神に訴えることができます。疑いの心からでなく、神の慈しみに信頼して、「いつまでですか」と大胆に祈ろうではありませんか。